

聞き書き史談ほか萬控え(一)

林 寅 喜

(会員・佐伯市中の島)

(一) 高橋翁聞き書きより

先日ふとしたことで現職時代の同僚から臼坪にお住まいの高橋市太郎翁を紹介され、お目にかかって昔の話を聞くことが出来た。

翁は臼坪に生まれ育ち、農業の傍ら数々の役職を経験されたこともあって、話題の方も実に豊富であった。そこで今回聞き書きした中から要約して、つぎの三話にまとめてみた。

第一話 臼坪とその周辺の出来事

臼坪という地名の起こりはいつ頃か知らないが、翁の
本家高山家の墓地には天保十四年(一八四三)に死亡し

た人で臼坪長藏と刻んだ墓がある、と言うので拝見させて貰った。

当時は小庄屋(臼坪にも役元と呼ぶ家が残っているから小庄屋がいたことになる)を勤めた者でも姓は付けられなかったから、百姓がつけてよい筈はない。しかし、上に臼坪と刻んでいるのでそれが地名を指したもののか、外に意味があつてのことかよく分からないと言う。

昔は戸数も人口も今とは比較にならない位少なく、何事も臼坪だけで行うことが出来なかった。そこで蟹田・平野・田ノ浦の三地区と一緒に合同で対応していたが、これ等地域活動を臼坪だけで行うようになったのは、大正の終わり頃からはなかったらうかと言う。

翁が子供の頃に臼坪から中村方面へ通じていた道は、松崎の地藏さん前からと地下じげの前からの二本しかなかったと言ひ、それも兎道のような幅の狭い道だったそうである。

中村は昔から住家が建て込んでいたが、地区内には今もあるような瀬戸道が多く、宮崎太陽銀行の前から蟹田に向かつて土手があったというが、翁は北中付近までしか記憶にないと言ひ、上には一抱えもあるような松並木



があったことを覚えていると話した。この土手も大正十
年前後に着工した常盤北中地域の耕地整理事業によって
削られ、畑地として整備された。もともと、すべての業
務が完成したのは昭和四年三月のことである。

ところで、この一帯はもともと海面を埋め立て、畑地
とした所であるから、僅か一米位掘り下げただけで貝殻
が出てくるといったような始末で、水捌げがよくなかつ
たことは今も同じであった。

一方、中村は昔海浜に近かったということから、井戸
が少なく飲料水には不自由していたようで、さきに書い
た松崎の地藏さん横にある小さな井戸から、荷ない桶で
担いでいた。今考えるとこれは大変な重労働であったと
思う。このような水汲み
の仕事が上水道の完成し
た昭和八年まで続いたの
であるから、毎日ではな
かったにせよ「昔の人達
は辛抱強かったと思う。」
と話した。

また、城東町と中村の



松崎の井戸



三 光 庵

昭和に入つて十年の二期から東小学校が開校になったことはよく知られてゐるが、この敷地造成に使用した土砂は五所明神下の山裾を削り、馬車や手車などによつて運んだと言ひ、そこは現在五所社の境内にある三光庵（神宮寺ともいふ）の跡地であつたさうで

境い目になる建設協会の裏（梶原）は、船溜まりとして

常時肥え船が繫留され、「コガ壺」（し尿を貯える槽）が幾つもある。近くに瓦工場があり、そこへ大正九年十五才の時始めた荷馬車で中村の松並木から、燃料に使う松葉と枯れ枝を集めて運ぶ仕事をしたと言ふ。

白坪が消防ポンプを購入したのが大正十二年ださうであるが、これがまた当時最新式で佐伯町でも最も早く、三年あと住吉神社附近から出火した船頭町の大火の際、その威力を如何なく發揮して賞賛されたと話してくれた。

ある。

開校した当時の東小学校は周囲がすべて畑地で、馬場の佐伯中学（今の鶴城高校）まで遮るものは何もなく丸見えであつた。今考えると夢のような話で懐かしく思うと言つていた。

第二話 中の島耕地整理のこと

昔中芳島といった今の中の島は昭和三十年代までは殆んど耕地で、所有者は白坪をはじめ中村・長島の人達が主であつた。ここを耕地整理することになつたのが昭和三十四年のことである。（組合設立は三十五年五月―後記）

工事は翌三十五年に入つて着手したが、大方は地権者の労力提供により、トロツコや軌条等の器材は建設省佐伯工事事務所から借り受けるなどして経費の節減を図り、三十六年夏には完成した。因に当時の賃金は男三二〇円、女二七〇円であつた。当時宇山地区でも三十四年頃から着手していたが、登記事務まで完了したのは中芳島の方が先きであつた。ただ換地に際して区域内にあつ

た農林省と大蔵省所管の財産（道路水路敷）買い取り処分をめくり、解決に時間を要したと覚えてゐる。

減歩率は一割程度であつたと思うが、その頃から始まつた都市部への人口集中化に伴つて、将来必らず宅地化されるであろうという認識のもとに、区域内の道路と水路敷すべてを市道として認定することを条件として、一定の幅員を確保する必要から、現状よりさらに〇・五乃至一・〇米宛無償提供することで地権者の同意を得た。したがつて、実質減歩率は何割か上積みされたことになる。

なお、当時の字名は登記上では「中芳島」となつてゐたが、工事完了後の換地計画に際し、これを改めて字「中の島」とすることとなり、併せてその手続きを取つた。

整理の概要は次ぎの通りである。

- 一、組合設立 昭和三十五年五月三十日
- 一、整理面積 三七、九ヘクタール
- 一、総事業費 千二百十六万円
- 一、地権者数 一四〇名

第三話 昔もあつた一村一品

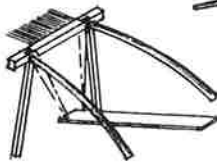
近年のように生活文化が急テンポで進んでくると、家庭で使う道具類のうちでもことに農家の場合、機械化と新製品の到来によつて不用となり、廃棄処分せねばならない農器具類が多く、今考えると民具として保存すべき価値のある物など多々あるように思う。この影響は仕事面まで及び、桶屋や鍛冶屋など全く見かけなくなつた。



唐箕



馬鋏



千齒



犁

使用されなくなった農具類

このような職人芸が消えて行くことは残念に思うが、時代のすう勢として止むを得ないと思う。

ところで、今大分県の一村一品は全国的にも有名であるが、昔佐伯にもそれらしきものがあつた。というよりも村々で多く作られまたは収穫された農林産物であるが、これを昔の人達が口伝えとして残したものに

『竜護寺筍（五三竹）、大内梅、長瀬大根

久部牛蒡、蛇崎人參、木立甘藷^も

白坪中村綿どころ』

というのがあつたと話した。

昔の河川はどこでも堤防らしきものなどなく、周辺は山林か竹藪によつて（自然護岸という）かろうじて水害から守つていた。

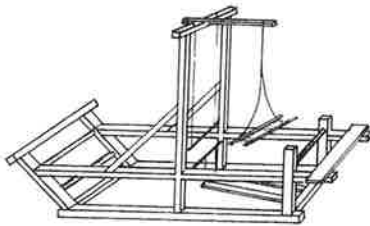
竜護寺の周辺でも同様に五三竹の藪続きであつたと考へれば自然筍も多く自生したに違いないし、大内には今も梅林があり、長瀬・久部・蛇崎は地形上番匠川と堅田川の合流点に出来た沖積地として、当然のことながら根もの野菜の収穫が多く、木立は土地が痩せて砂礫質のため甘藷の作付けに適していること、白坪・中村の綿は自

給自足のため奨励されたもの。と筆者は思う。

白坪と中村の間、今の常盤北中地域は中村内とか浜の畑といつて、綿を植えていない畑はないくらい一面の綿畑で、実がハジけたあとは真白く雪景色を見るようであつた。これを摘んで綿操り器（手動式）にかけて種子を取り除き、あとは綿打ち屋に頼んでいたが、これ等は何れの産物も現在の一村一品に通ずるものと考えてもよいのではないかと翁は言う。

なお、昔は機織り器

具など農家なら何処にもあつて、普段着から緋や浴衣^{ゆかた}地まですべて家庭で織つていたと言ひ、これを染める「紺屋^{ゑんや}」もこれ又何処の村にも二・三軒はあつたと言ふ。中村にも二軒あつたと覚えていると話してくれた。



機織りの器具



(二) 郷土読本の中から

昔あった行事のこと

農業などというものが全くなかった時代、稲作の成育期間中、長雨や水不足などの天候不順と並んで恐れられていたものに病害虫がある。昔はこれに侵害されると全く打つ手がなく、ひたすら神仏に祈るしか方法はなかった。これ等神頼みの行事は今なお各地に根強く残っている、『虫追い』とか『虫送り』などと呼ばれ、今でも時折りテレビや新聞紙上で見聞きする。

つぎに掲げた『虫送り』は、明治の中頃まで実際に行われていたという行事の模様を、昭和二年木立小学校が刊行した『郷土読本』の中から、抜き書きして紹介したものである。

行事の様子は武者人形やのほりを担いで村中を回ったあと、『かんむしろ』という標高五七六米の山頂に、人形やのほりを立て、すべてが終わる。といった一日がかりの催しであったようだ。

しかし、これを現在感覚でとらえて見ると、それ程危機感が伝わってこないのは何故だろうか。

虫送り

田植えがすんで土用まで

天気が続いて順調に

発育したと思う間に

稲田は一面こぬか虫

村の伍長（区長）が集まって

相談したのは虫送り

竹で作った法螺の貝

実盛さんや御家来や

手塚の太郎や大船や

何れ劣らぬ巧者振り

藁人形も作りかな

金紙銀紙や赤い紙

鎧にお馬に陣笠に

色の調和もたてよこも

見事に出来たお人形

神の御前に据えられて

御祈念こめた神主の

祝詞のりとの声に神がかり



威力はあたりを払うとよ

さてもいよいよ當日は

村から集あつう回し手に

実盛さんも御家来も

手塚の太郎も大船も

七・八尺の竿の先

突き上げられて回される

「ゴーシンダゴーシンダ

実盛さんは護神だ」

調子を揃えて面白く

芝居みたように回される

「萬作エー」の音頭とり

選りにえりたるチャンピオン

大きな御幣ひっ担ぎ

今日が晴れよと取る音頭

節は長いがきり音頭

先ず一番のその歌は

「萬作エー萬作エー

今年は萬作穂に穂が咲いて

道の小草に米がなる

万才エー万才エー

万才エー思い事かない

末は鶴亀五葉の松

打ち出す鉄砲勇ましく

トントンプーブードンドンドン

実盛さんを先頭に

お人形担いで懸命に

次ぎの立て場に走り込む

太鼓担ぎや音頭取り

神主さんや船担ぎ

走って行くのはえらからう

氏神さんを振り出しに

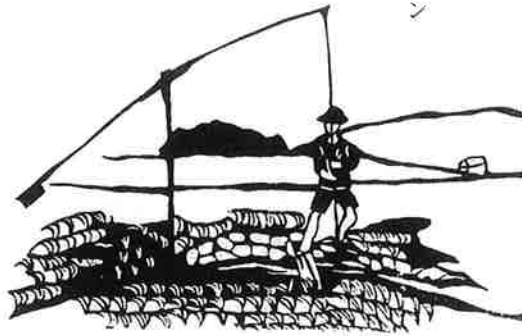
まずらの塚に角道の

井堰のそばから亀の甲

薬師庵から吹河内

馬の越え峠を走り越し

大河内の山駄床



小中尾山田は二田ヶ原

ひとつち山田をお終いに

かんむしろ山に突き立てる

行くては違う年々に

神のお告げがあるという

一週間もたゝぬ間に

近所は一面こぬか虫

小草や茅や木の葉まで

食いつくしたというどかし

これが昔の虫送り

時代変わればこと変わる

世の文明に伴ないて

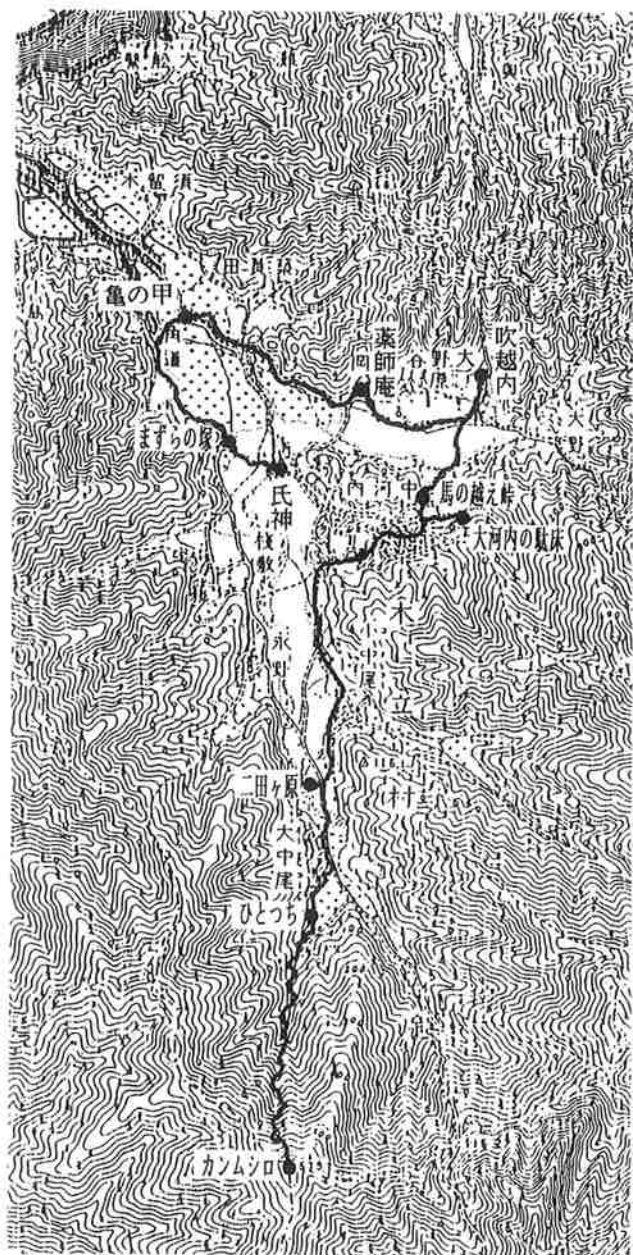
明治の御代の半ばごろ

こんな行事も跡絶えて

今は昔の物語り

伝えて残す虫送り

伝えて残す虫送り



虫追いの順路（図は明治36年調整の5万分の1）